

血槍二代

早乙女貢

(一)
青春編



毎日

血槍二代

(一) 青春編 早乙女 貢



毎日新聞社

血槍三代 (一) 青春編

昭和四十九年三月二十日 印刷
昭和四十九年三月三十日 発行

著者 早乙女 貢

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒550 大阪市北区堂島上

〒650 北九州市小倉北区紺屋町

〒460 名古屋市中村区堀内町

印刷所 東京ベル印刷

製本所 正文社

〈検印廃止〉 ©早乙女 貢 一九七四

0393-406001-7904

〔定価はカバーに表示してあります〕

目

次

夜の河

うんすん骨牌

出奔

雪の肌

京の夢

雑賀鉄砲

槍と女

セ

兎

畠

空

二三

一三

一五

根来寺炎上

一五

紀州落日

一五

愛憎の辻

二〇

海の牙

二三

血槍転々

二五

筑紫野の女

二五

装幀 安彦勝博
挿画 御正 伸

血槍三代
(一) 青春編

「サンデー毎日」連載

昭和四十六年四月四日から
昭和四十七年四月二日まで

夜の河

一

宵のうちに通り雨が あつたらしい。草は濡れていた。この辺りに多い赤松の幹も、触れると冷やりとする。水野藤十郎は頬をつけた。火照った頬にこころよかった。

「おい、孫六、こうすると氣持がいいぞ」

前を行く影に声をかけた。

「叱ッ、声が高えでよ」ずんぐりした影が振りかえって、手を振った。「落武者狩りで氣が立ってるでなも、沈黙しておくれアも」

「びくびくするな。いまごろ起きている奴がいるものか」

松林といつても疎らだった。延び放題の草は腰のあたりまである。林の中を行くぶんには滅多に村人に見咎められまいが、林が切れると田圃になる。

八日の月が潤んだ柔らかい光りで、夢の中のように青く平原を照らしていた。ゆるやかに囁くような波の音が聞えている。川に近い。川面にうつる月の照りかえしも、余分な光量になっているのだろう。

月夜の晩に夜這いするのは狂気が死急ぎでなも、と孫六が押し止めたのだが、おれはその両方ともだ、と藤十郎は笑って、馬に飛び乗ったのだ。

「案内するのがいやなら、頼まぬ」

と、馬腹を蹴って走り出したので、孫六は寝た間も放さぬ鉄砲を抱えて、追って来るしかなかった。

（言い出したなら、聞かぬ和子でよう）

三河刈屋城で四万石ほどの水野家の後嗣という身分も考えぬ。若さは反省の閑を与えない。父と衝突することも屢々だが、後へは退かぬ。

前髪のとれぬところから大人も戦場往来の強者も顔負けの功名を樹てている。すぐれて上背が高いのは祖父譲りで、力もある。一刻も凝として居れない気性で、機敏なもの、戦場育ちであろう。思いたったら、すぐと行動に移さないと氣が済まない。

今夜もそうだ。

長陣の無聊さで、陣場借りの連中の間にまじって博奕をやった。思いきりがいいから、大きく賭ける。丁銀の十匁二十匁という勝負だ。勝つても負けても大きい。

そのうちに、負けがこんだ奴が、もそもそと扇子を出した。

これが目もさめるばかりの孔雀の羽扇。南蛮渡りの品である。どこかの城を攻め落した際の分捕り品か、公卿の屋形からでも盗んできたものか。

「よからう、こいつ全部を賭ける」

膝前にあつた丁銀をざらざらと押し出した。

壺をひらくと張つた丁目に、扇を手にしたとたん、ある女を思いだした。

(似合うな……)

思つたとたんに、立ち上つていた。

「博奕よりも女がいいわい」

勝つた丁銀は振りかえりもしない。孫六があわてて大きな革財布にざらりと深いこむ。その間に藤十郎は筆毛に飛び乗つていた。

小牧山麓の陣所から、一気に南下して、現在の名古屋市の守山区になつてゐる小幡から矢田川を渡河して猪子石の村へ来たのである。

小牧山へ出陣したのは半月ほど前だが、その途次、この村で、綺麗な娘を見たというのだ。それだけでは、わかりようがない。孫六は弱つた。

「名前を教えてちょうでアも」

「知らん」

「ほな、探しようが無えでなも」

「探せ。その辺りへ行けばわかる。通りすがりに聞いたら、

引込み牢人の娘じゃとか言つていた」

「ほりヤア、疲勞い事でござアまする」

「尾張のことなら、狐穴まで知つてゐると、日ごろの高官はどうした」

孫六は困つたときの癖で、寸づまりの顔をべろりと撫でた。

「へえ、へえ、ちょこーとなも」

だが、案じることはなかった。戸数の少ない村だ。すぐわかつた。藤十郎はその家の前の二抱えもある老樹の桜を憶えていたのだ。

もうすっかり葉桜になつていたが、丁度、あの日は、一朶も蕾を余さぬ満開だった。夜気にこもつた青葉の匂いは性慾的だ。

「ここだ。娘の部屋はどのあたりかな」

小具足だから身軽だが、刀が邪魔だ。藤十郎は背戸の藪の中に刀を突っ込んで、

「孫六、お前も鉄砲を隠しておけ」

「へえ、わっちは、こっちゃでお待ち申すでアも」

「莫迦なことを申すな。そこで待たれていて、こっちが楽しめるか」

「わっちも面白くねえがよう」

「孫、お前は姉さのほうを狙え」

藤十郎はにやりとした。笑うとくぼが出来る。精悍な顔が急に子供っぽくなる。

夜這いには、こつがある。女の足のほうから廻つて忍び込まねばならぬ。北枕は忌まれてゐるから、方角を案じればいいのだが、武家の場合は、出入り口に氣をつかう。常に侵入者への警戒と、素破ッという場合の対応を忘れない。娘、人妻

に交りはない。

乱世の武家の心得である。引込み牢人となって帰農しても、武家作法は身についているものだ。

(ここだな……)

藤十郎は迷わなかった。

かんがが当った。何事も馴れだ。かんに理屈はない。杜の嗅覚がはたらくのかもしれない。

藤十郎、この女の寝ている傍に近づくときの緊張感も好きだ。まんまと入りこむと、どっかと胡坐をかいた。

山の端に沈みかけた月が明り障子にさして、部屋の中は仄明るい。

娘は寝苦しうに、夜衾を胸のあたりまでずり上げていた。

陰曆四月八日、初夏だ。宵の通り雨が、温気を齎したように、

夜気はよどんでいる。戸外は青葉の匂いで染められていたが、部屋の中は、一柱の香煙がゆるやかに立ちのぼって、寝息の臭いを消していた。

静かな寝息である。時々、ふっと眉をひそめるのは、夢を見ているのであろうか。

「愛らしいの」

藤十郎は、孔雀の扇子を枕元へ置いた。贈物のつもりである。この夜這いの若殿は、ゆっくりと小具足を脱いで、帯を解いている。

別段、息を殺しているわけでもない。ここまで入ってくれば、もう焦る必要もないと思っているのか、悠然たる動作で

ある。

まるで、若妻のもとへ帰って来た夫のような、ためらいや慮りのない動作で、とうとう下帯一すじになってしまった。そのとき、恰も、若者の強烈な体臭が眠りを破ったように、娘は、ふっと眼をあけた。

これを見おろして、

「やあ」

と、言った。旧知のような――

にこりとした頬のえぐぼが、まだ夢のなかかのように、錯覚させた。

娘は、ぼんやりした眼で見上げて、

「だれ？」

「おれさ」

「え？……」

「憶えていないか、半月ほど前、ここを通った者だ。井戸を借りて汗を拭いた」

あ、と思いだしたのは、少し間を置いてからである。

「一目見たときから、好きになったのでな」

「……………」

「早く来ようと思うていたのだが」

まるで、約束したような口吻だ。

「……だれ？」

「藤十郎だ。抱くぞ」

そのときになって、娘はようやく醒めた。

この男が、妙に落着きはらって、陽気で快活ではあるが、そして手順は違うが、まぎれもなく、夜這い男であることを知った。

「あっ」はじめて、ぎょつとなった。

逃れようと身を起したのが、そのまま、するりと馴れた腕の中に抱えこまれていた。大きな手が口をふさいで、

「おれは惚れた女は、必ず、抱く」

囁いた。女の心を痺れさせる、男の低い声である。唇を吸われた。抗いをやめたのは、母ですら触れぬ秘所へ、臍面もなく、男の手が延びたからだ。

的確に、指がそこへ届いている。じーんと何か抗し難い魔力のようなものが、女の五体から力を抜きとった。

歯をこじあけるようにして、舌がすべりこんできた。そうしたことも、はじめてだったのである。娘は、ただわなわなするだけだった。

藤十郎はそんな抵抗をやめた女性に満足したように、横たえようとした。片手は秘所をひたとおさえたまま。指頭が柔髪に触れている。

娘の手が、枕元の懐剣を掴んだ。瞬後に鞘が頸すじのあたりを打った。拔身だったら頸動脈が切れている。力一杯の振りが、鞘を勢いよくはね飛ばして、さっと、突いてきた。

「よせ」

しゅっと、肩に冷たいものが走った。

「つまらぬ。おれは遊びに来たのだぞ」

手頸は、少し力を入れるだけで折れそうにいたいいたい。ぼろりととりおとしたのを、そのままに、藤十郎はねじ伏せて裾をかきたてた。

着痩せする体型なのか、思ったより、腿には肉が盈ちていたし、乳房も掌にあまった。すでに、ひとたび男の指を濡らした柔髪は、応えるのも早かった。

あるいは、藤十郎の裸身の肩からしたたる血が、官能を刺戟したのかもしれない。

娘が、熱い息を洩らして、藤十郎のからだを抱きしめてくるまでに、幾らも時間はいくらなかった。この燃えかたの早さにもかかわらず、男を容れるのは、はじめてだったのだ。

藤十郎は、はつきりとそれを感じている。

髪を乱して、悶えるさまには、まだおのれの官能を操るすべを知らない生硬さがある。

「――名前は、そなたの名は？」

藤十郎は女の裡で動きながら聞く。

「しの……しの……」

答える喘ぎも愛しい。さらに藤十郎は昂まってくる。

どこかで女の叫びが聞えた。

失敗った、と藤十郎は思った。（孫六が……）へまをやった

に違いないと直感した。

かん高く罵る女の叫びは、怪鳥がしめ殺されるときの声の

ようだ。

一羽に誘われる雞鳴のように、騒ぎが起った。男の声、女の声。何かかんかん叩いてゐるのは村人を呼び集めてゐるのか。

「こりゃいかん」

藤十郎ははね起きた。

二度目の愉悅が盛り上ったところだったが、思いきりが肝腎だ。

「面倒になったな。そなたは知らぬふりをしてゐるがいい」
小具足を一抱えにだいて、裸のまま、外へ飛び出した。
直感した通りだった。

孫六が五六人の男たちに捕まっていた。夜這いの風習はこの村でもあるから、命までとられることはないが、強盗と見られたらそれまでだ。もつとも夜這いも村の若衆だけのことで、よそ者には厳しい。打ち殺されてもしかたがない。案の定、

「打ち殺してやるでよう」「牛裂きが面白えぎゃあも」「その前に鞆丸を抜がそうだなも」

孫六は両手をねじりあげられ、前とうしろから槍の石突で小突かれていた。

おかしなことが、物蔭から見た藤十郎は、
(あいつ、女のほうはどうなったのか)

ひとまず済んだところを発見されたのなら、諦めもつくが、まだ入れもしないうちでは、間尺に合わぬ。

「やいやい、殺すのぎやア、この鬼ども。ほなら、さっさとやってちよう」

自棄っ八で喚く頬げたを、肩幅の広い男が、ドベクソめとぐわんと薪維棒で殴りつけた。

「あ、これ、ちょっと待て」

見殺しにできぬ。藤十郎は裸のまま出て行つた。下帯一つの裸身は、若さに溢れている。筋骨質のからだを、月光はさつと蒼い光りの一堀を与えただけで、沈んでしまった。

「——なんだ、汝りゃ、どこの馬の骨ぎゃあ」

「その男の主人だ。おれに免じて許してやってくれ」

「へえ？……」

男たちは顔を見合わせた。

「主人だ。許してくれ。どうでも許せぬとあれば、仕置はおれが受けよう」

「ふんなら、お前はんとこの、奴ぎゃあ」

責め甲斐があると思つたのか、村人たちは身代りを承知して、藤十郎を縛り上げてしまった。

もう四更を廻っている。東の空が紫紺の色を明るく加えてき、水辺の葦のあたりで、ヨシキリがするどく鳴いている。

「ちょこつと悪イようなわ、なも、身代りなら、諦めてくれア——」
「陽が上ったら、石子責めするでなも。猪子石の掟でアも」

そんな掟があるとは知らなかった。知っていたら来るのではなかった。

（いや、それでも来ただろうな……）

いの、と称った。あの肌の新鮮さ。来てよかった。抱いてよかった。

孫六が小牧山の陣所へとってかえして助けを呼んでくるのには間に合わないかもしれぬ。

両手を縛られて、下帯一本の裸身を葦の中へ引き込まれた。縄の端は舟つなぎの杭につながれて、なんとも情けない姿だ。川の水は胸のあたりまでであった。

（これで、石が飛んできたら、逃げようがないな。水野藤十郎、矢田川で石子責めに果てるか）

そいつも運命ならしかたがない。

そのうちに、何か地鳴りのようなものが聞えてきた。どろどろと、地震のような、遠雷のような、川底から揺さぶるような重く、激んだ音だった。

「はてな、あれは？……」

耳を澄ますと、さわさわさわと、鋸の触れ合うような、ざわめきにも似た音が、風に乗ってくる。

軍勢の音ではないか。だが、ここから小牧山までは三里近くある。いくら曉闇の風でも、そんなに遠い物音は運んでこれない。

「すると？……」

一昨年の本能寺ノ変以後、明智光秀を誅して一躍、信長の後継者と目されるに至った羽柴秀吉は、東海の徳川家康との対決を望んで十二万五千の大軍を動員して犬山城まで来てい

る。これを邀撃すべく、小牧山を中心に布陣して待つ徳川勢はおよそ六万。これは伊勢の織田信雄との聯合軍だ。

この決戦が死活の岐れ目になるとして、周辺に砦や土塀を築き、あるいは濠を掘るなどして、互いに慎重なまま、未だ開戦の日を迎えていなかった。

戦線は当然、小牧山北方一帯になるはず。それが三里も南に、数万の軍勢が動いているとは、どういうことなのか。

空に明るみがさし、川面は微かにその光りをうつして、朝霧を吹き払おうとしていた。その彼方に軍勢が動いているようであった。小幡の辺りである。

「こりゃア、大変なことになったぞ」

自分の身も忘れて、藤十郎は、向う岸に目を凝らし、一筋の旗差物でも見えぬか、馬の嘶きでも聞えぬかと、五感をとぎ澄ました。

その胸までできている川水が、ふいに揺れた。

煙のように渦を巻いて、ゆっくりと流れてゆく霧の中に、一艘の舟が近づいてくるのが見えた。

「――もし、藤十郎さま……」

女の声ではないか。

咄嗟に、

（おしのか？）

と、思った。

が、すぐに打ち消した。無理強いに犯したばかりの娘が、人目を忍んで逢いに来るはずはない。その行為で私刑を喰っ

ているところだ。

波が揺れ、小舟は霧を払って姿をあらわしてきた。舟の上には、女が一人。器用に櫓を操っている。

見たこともない女である。

「そなたは……」

「水野藤十郎さまですね」

女はたしかめるように言った。小作りだが、きりっと肉の締った軀からだつきに、

（齒はごたえがありそうだな）

と藤十郎は感じた。

一刻もすれば、石子責めで打ち殺されようというのに他人事ごとのように思っているのか。この突然、霧の中からあらわれた謎の女の姿態のほうに、気にかかっている。

「誰だ、そなたは？」

「水野の和子わこを助けに来た者」

「そいつは有難ありがたいが……名は？」

「名前なんか、どうでもいいでしょ」

薩さつ張りした気性らしい。鞘巻さきまきを抜くと、手早く縄を切りながら、

「それとも、名も知れぬ女に、助けて貰もらったら、水野藤十郎

勝成しょうせいの面目めんもくに関する、とても仰うや有ありるの……」

「そういうところだ」

「じゃア止めます」

さっさと女は短刀たんとうを藏しまった。

「おいおい、殺生ころしだぞ、それは。せっかく助けに来て、途中で止めるとは。盃さかずきを口のそばまで持ってきて叩き落されたようなものだ」

焦こらすのではなかった。女はもう櫓を握にぎっている。

「おい、去ぬるのか」

「名を聞くから」

「聞きたい」

「強情じやうじやうなひと」

つと、女は顔を寄せた。とおもうと素早く藤十郎の唇を吸った。

まさかそんなことをするとは思ひもしなかったことで、あと、驚いた瞬しゅん後に、女は唇を離して、にこりとした。

ぎィッと漕こぎだしてから、またその惡戯どくぎっぽい笑顔が振りかえった。

「切れるでしょ、もう……」

いましめは半ば切っていた。

そう言われて、藤十郎は、むッと両腕りょううでに力を入れてみた。切れない。もう一度。ぶつん！と腕のあたりで小気味よく、離れた。

「しめた！」

手頸てくびの縄も刃が入っていたのだ。渾身みんしんの力をこめて切りほどいたときは、しかし、女と小舟は霧のかなたに消えようとしていた。

「おーい、待ってくれ」

呼び止めようとしたが、もう返事はない。どんどん漕ぎ去ってゆくのだ。

「妙な女だな……」

狐につままれたような気持であつた。夢を見ているのではないか。霧はしだいに霽れていく。見残した夢のような女の出現に首をひねっていると、岸辺が騒がしく、村人たちのざわめきが聞えてきた。

（しまった、さっきの声が聞えたのか）

十六歳の初陣以来、戦場往来の割れ鐘声は、こせこせと秘密めいたことができない。

ともかく、逃げねばならぬ。馬だ。馬と刀。物ノ具はなくとも、これだけは必要だ。藤十郎は水に潜った。

三河刈屋の生れだから、逢妻川で産湯をつかった。衣ヶ浦育ちといつていい。水には強い藤十郎である。

暫く潜泳して葦の中で息つぎに頭を出したとき、背後の方で、

「逃げよつたでエ」「夜這い侍が、逃げたぞやなも」狼狽の聲がした。

もう少し解くのが遅れたら、捕まるところだ。だが、逃げたと知ったら、まず馬を押えられるだろう。急がねばならなかった。

藤十郎は水の冷たさも感じなかった。第一、夜明けまでに小牧山の陣所に帰らないと、

（また父上にお目玉だ）

頭迷を絵に書いたような父の顔がちらりと掠めた。

馬は幸いと林の中につないだままになっていた。村人たちが右往左往しているのが遠くに見える。

刀はあの家の背戸の藪の中に突っ込んであるのだ。危険だが、また戻っていった。刀さえ手に入れば、村人が十人や二十人かかってきても、斬り払うことに自信はある。

刀も無事だった。まず下帯にさす。そこで気がついたのは、孫六の鉄砲が、やはり傍に突っ込んだままになっていたことだ。

「なんだ、彼奴、捨てていったのか」

いや、死んでも鉄砲を放さぬ孫六のはずだ。とすると、まだそこらに居るのではないか。

孫六は居た。

逃げるどころではなかった。女を抱いてほたほたしていたのである。

女は——おしのの義姉だった。死んだ兄の女房になって三年。おしのとほ五つほどしか違わない。

孫六に抱かれると、狂ったようにのたうって夜衾もはね除けて、喜悦に溺れた。

初夏というよりは、晩春の早朝である。

暑いということはない。にも関わらず、お民は汗みどろになつて、飽くことがないかに見えた。